

鳴門教育大学 教職大学院に学ぶ

現在、将来にわたり、求められる教員像を探求しつつ、教育成果の検証を重ねながら、専門職業人としての教員を養成すること。それが鳴門教育大学・教職大学院のミッションです。

生き生きと取り組むために

平成 23 年度より、小学校において新学習指導要領が全面実施され、第 5・6 学年で年間 35 単位時間の「外国語活動」が必修化されました。鈴江さんは、県の事務局担当としても外国語活動の充実を目指して授業改善に打ち込む日々が続きました。

しかし、ある時、あまりにも多忙で、実践した授業を振り返り、改善する時間も働いている自分があることに気が付きました。ところが、そのような状況の中でも、外



鈴江

裕子 先生

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース修了



国語活動だけは、子どもたちと共に、生き生きと取り組むことができたのです。今さらながら、外国語活動の魅力が再認識したものでした。

そこで、一度、学校現場を離れて、視点を変えることで、新鮮な心で、さらに子どもたちの心をつかむような授業を実践する。全国の地域や小学校の取組に学び、外国語活動に関する最新の情報を各研究会や研修会、そして、学校訪問等で収集する。これまでの経験知や実践知も活かしながら、多忙な現場の教師が、生き生きと取り組むことができ、安心・楽しさ・自信につながる、外国語活動を提供する。また、外国語活動に留まることなく学級経営、子どもの内面理解にも学びの視野を広げたい。そんな願いをもって、鳴門教育大学教職大学院に入学しました。

CASE 6:
つながる力で夢をかなえる

/ You can speak **English!** /



Nice smile!

Good teamwork!



Home run!

/ You can play **baseball!** /

Good job!



/ You can play **kendama!** /

友だちとつながる「YOU canメッセージ」

外国語活動の一つとして、「YOU can メッセージ」があります。まず、みんなに自慢できることを3つ紹介する「できることスピーチ」を行います。苦手なことも勇気をもって1つ紹介することを大切にしています。

次に、クラスみんなが、一人一人に「YOU can メッセージ」を書きます。「できることスピーチ」が一つもないと言っていた子が、「YOU can メッセージ」をもらって、自分の良さを再確認するときの、にこやかな表情を思い出せば、人と人とのつながりがどれだけ大切なものかと思

うのようです、柔らかな微笑みを浮かべる鈴江さんです。

この学習活動は、自己受容・他者受容・自己理解・他者理解等、人と人とのつながりや出会いこそがコミュニケーション能力を高める土台となることを物語っています。

将来につながる学び

自分の将来像を描く「あなたの夢をかなえるための時間割」を書いてもらおうと、外国語活動での異文化の触れ合いから楽しさを感じ、外国語を学ぶ意欲が引き出されることがあります。「夢はサッカー選手、海外で活躍するために英語を学びたい」、「お菓子屋さんになって、外国の

鈴江先生の研究概要

「つながり」を意識した外国語活動

Research

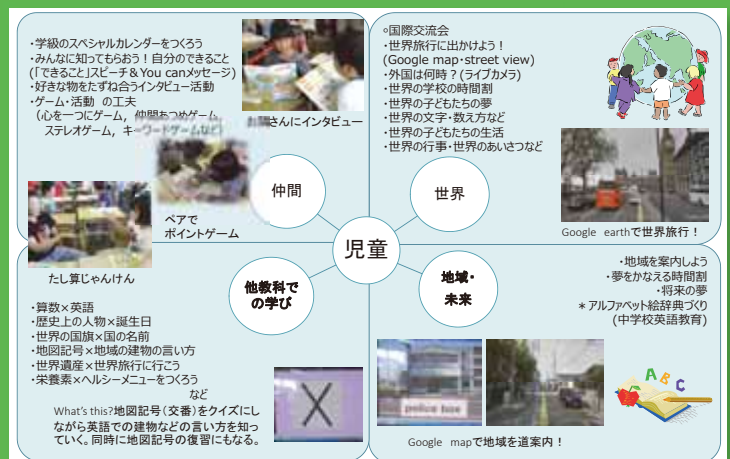
学校評価・学校要覧の分析をはじめ、学級担任へのアンケートや聞き取り、児童アンケート、授業観察・分析、カリキュラムマネジメントや年間計画の見直しから学校アセスメントを行い、「外国語活動」に関する置籍校の課題を把握した。

Plan

Researchをもとに課題解決に向かう手立てを考え、実践研究の構想図を作成するとともに実習計画を立てた。また、外国語活動の年間計画、単元・評価計画、授業計画案を作成した。

Do

「カリキュラムの改善・開発・実践」を行った。児童と世界、仲間、地域・未来、他教科での学びをつなぎ質の高いコミュニケーション活動の展開を図った。2020年度を見据えて3、4年については朝の15分間のモジュール活動を行った。



人が店に来た時に会話ができるように]、「外国へボランティア活動に出かけたとき、英語ができたら」と積極的にコミュニケーションを図る態度を養い、英語を学び続けようとする子どもたちが育っています。

中学校、高等学校で英語を学んだ先には夢の実現が待っていることを信じて、異文化を持つ人たちに対しても、よりよく関わっていく子どもたちを育むことが目標です。

中学校とつながる

小学校6年生の時担任した男子生徒が、中学校になって、「英語の時間がつまらない」と、SOSのサインを送ってきました。中学校に出向き、英語の時間を観察させてもらう機会を得た折、その男子生徒が机に突っ伏したままの力のない態度で学習している授業風景に遭遇しました。

「この子の本当の良さを伝えよう」と思い立ち、6年生の時の外国語活動の動画記録を中学校の外国語科の担任に視聴してもらうことにしました。「グッドジョブ」、「ワンダブル」が飛び交うなかで、生き生きとロールプレイングに取り組む生徒を見て、その子の可能性に気付いた外国語科の担任は、英語の楽しさを伝えるためにゲーム性も取り入れた授業を行ってくれるようになりました。

小学校段階で生活に密着した、生きて働く本物の外国語活動に触れる機会を提供し、意欲関心を高め、中学校、高等学校へつなげることで、コミュニケーション能力が育成されると考えています。

英語は心が動かないと出てこない

教職大学院修了後、学校現場に帰ってからも、子どもたちが夢中になって取り組む授業を、子どもや教師に提供したいという言葉が鈴江さんから返ってきました。

外国語活動は、心と心をつなぎ、学級経営や教科教育の素地になります。それを理解し、担任が、主体的に取り組んでほしいという思いがあります、と力強く続けます。

とにかく、どんどん英語を使ってALTと交流しようとする姿を子どもたちに見せること。それがモデルとなって、子どもたちも意欲的に取り組みます。教師が「やってみようか」とまず取り組んでみるのが大切です。そのハードルさえ越えることができれば、後は楽しい会話が弾みます。実践知から生まれた熱い言葉には説得力がありました。

「英語って心が動かないと出てこんね」と教えてくれた子どもの言葉を大切に、今日も子どもと教師の心が動く時を見つめています。

コミュニケーション能力の素地を養い、人とよりよくかかわる児童

Check

高学年の外国語活動の授業については毎時間のReflectionカード(児童用)で授業の振り返りと次時の授業計画の練り直しを行っている。学期の終わりには、児童に外国語活動のアンケートやインタビューを行った。また、学級担任の感想や意見をもとに授業や単元を見直した。

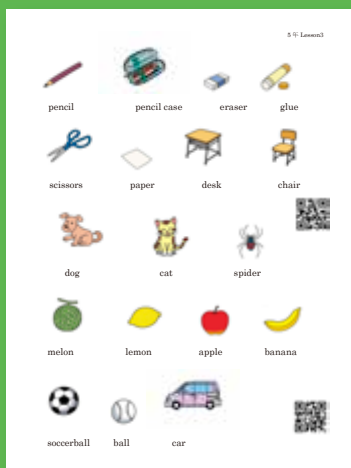
Action

児童や教師の意見をもとに、授業内容や単元などの改善をしている。文字に慣れたり、音声を手で持ち帰ることができたりするように、文字と音声QRコード付きのワークシートを作成した。

Conclusion

インタビューを行った児童の全員が「一番楽しかったこととして「友達、人とのかわりが深まったこと」を挙げている。また、「どのようにすれば自分のことを伝えられるのか」ということも体験的に学んだ。さらに、異文化を知ることや英語を学ぶ意欲も高まった。

教師についても外国語活動に関する見方や授業観に変化が見られ、外国語活動のよさや授業の進め方などについての理解が広がった。外国語活動への前向きな取組が見られるようになった。



「あの先生がいないと困る！」

そんな先生だからこそ鳴教の教職大学院へ

教師力UP

頼れる、頼られる先生は、実践を省察し、学び続ける意欲を持ち続けているものです。より高い“教師力”を身に付けることをめざすなら、理論と実践の融合が特長の教職大学院が最適です。

学校力UP

指導教員は学生と共に勤務校を訪ね、1年次の学校課題アセスメント、2年次のフィールドワークを通じて課題解決を目指します。在学中も、勤務校にとって、大きなサポートが得られるのです。

地域力UP

教職大学院が目指すのは、リーダー教員の育成です。勤務校はもとより、地域の教育界に資する、学校や地域で指導力を発揮できる人材を育成するには、教職大学院を活用ください。



変化に対応した教育環境づくりの推進に向けて

徳島市教育委員会 教育長 石井 博

めまぐるしく変化する現代社会にあって、子どもたちが社会を生き抜くために身につけるべき力も変化しています。こうした変化に教育的確かつ迅速に対応することは極めて重要な課題であり、教員は絶えず知識・技能の刷新に努め、新たな学びに応える実践的指導力を高めていくことが求められています。鈴江さんの「小学校外国語活動のカリキュラム開発」についての研究も、グローバル化の進展に伴う新たな学びに対応した取組であり、成果の学校

現場への還元が待ち望まれます。

徳島市から鳴門教育大学教職大学院へは、平成20年度の開設以来、7年間で36名の現職教員が入学しています。教職大学院での学びは、自らの資質能力の向上に留まらず、所属校での実習や研究成果の普及を通じて、徳島市全体の教師力向上にもつながっています。

今後も、鳴門教育大学との連携・協働により、教員の学びを支援し、変化に対応した教育環境づくりを一層推進して参ります。



実習を通じて学校現場に広がる様々な効果

千松小学校 前校長 桑原 義則

教育再生実行会議からの提言「小学校英語の早期化、教科化、時間増等」が出され、現在各校では様々な対応を考え始めています。このような中、鈴江さんが「『つながり』を意識した外国語活動のカリキュラム開発」をテーマに大学院で学び、現場実習を行うことは誠に時宜を得たものであると言えます。

実習を通じ、教員からは「ともに授業をすることで、授業の流し方や各学習活動の意図、評価の観点等がよく分かった。」という声が、

また児童からは「活動を通して友達とやりとりできる所がよい。」という声が上がっており、適切な英語活動が、児童のコミュニケーション力向上にも効果的であることを感じます。

本校教員は、鈴江さんとの実践を通して英語活動の楽しさを実感し、指導に対する安心感も広がっています。今後この安心感が指導上の自信へと高まることを期待しています。

(平成26年10月収録)

◆お問い合わせ

鳴門教育大学 教職大学院コラボレーションオフィス

電話：088-687-6598 ファクシミリ：088-687-6694 E-Mail：collabo@naruto-u.ac.jp

鳴門教育大学ホームページ <http://www.naruto-u.ac.jp/>

Recurrent Education



関わり、寄り添う

阿部 和代さん

[徳島県立城北高等学校]

院生活2年間は、出会いと刺激にあふれた最高の場でありました。中でも、臨床専門の事例検討では、異校種の事例に触れ、生徒指導の根本を見直し、寄り添うことの必要性和重要性を再確認することができました。

高校現場に戻り、交流することを苦手とする近年の高校生に対しては、体育授業の導入に構成的・グループエンカウンターを取り入れ、ワークショップ形式の保健授業から、個々の意見を引き出すなど、学びを生かしながら授業に向かう楽しさを感じています。どんな時も、関わりの手がかり探しのアンテナは、フル活動！

寄り添うことで、初めて見えてくる生徒の背景と姿。早急な判断を強られることもありますが、事象に対して、冷静に判断し行動する・肝に銘じるところです。クラスでは副担任として、客観的な態度で関わる段階を見極めながら出番待ちをしています。

共に泣き・笑い・怒鳴り合いながらも寄り添い続けた生徒たちが巣立ちの準備を始めました。部活動引退の時、口々に放った「学校の中のお母さん」。今後も、明るく、そっと寄り添える学校の母であり続けたいと決意を新たにこの頃です。

(平成23年3月学校臨床実践コース修了)



院での学びが支えに

岩井 崇通さん

[高知県土佐清水市立清水中学校]

大学院修了後に、現任校へ赴任して2年目となる昨年度、市内5校の中学校が1校に統合となりました。過去の事例からしても、統合時に学校が荒れることは予想されました。そして、スタート間もない1学期から心配していた状況は見え始めました。教師への暴言、授業妨害、エスケープ、いじめ等々、日々問題の起こらない時間はなく、学校に出て来られなくなる生徒や体調を崩していく同僚も増えていきました。

このような厳しい状況の中で、大学院における生徒指導、教育相談を中心とする理論と実践が融合した学びは、自分自身にとって大きな支えとなりました。現任校の抱える課題と院在学中に取り組んだ置籍校の課題とは、実際には重ならない面も多くあります。しかし、教師としての経験知だけで対応していた時と比較し、院での2年間の学びを終えて現任校の課題と向き合う中で、多様な捉え方や見立てができていますと思います。

本校も、まだまだ時間はかかりますが様々な取り組みを通して、今年度は学校全体が確実に変わってきています。学校臨床実践コースでの学びを教育の現場に生かし、これからも教師としての力量を伸ばし続けていきたいと思っています。

(平成24年3月学校臨床実践コース修了)



現場に届ける子供に届ける

増井 教訓さん

[静岡県教育委員会義務教育課 指導主事]

「理論と実践の融合」という教職大学院の基本理念にひかれ入学した鳴門教育大学での2年間は、学ぶことに対する喜びや充実感を思い起こさせてくれた2年間でした。また、教師としての自分の在り方をじっくりと見つめ直すことができた2年間でした。

教職大学院で学んだ幅広い理論と鳥瞰的に学校を見る視点、また協働的に課題に取り組む手法は、勤務校の研修主任として、また地区の教科部長として大変役立つものでした。勤務校では、対話型の授業を通して生徒と共に学ぶ喜びとワークショップ型等の校内研修を通して先生方と共に学ぶ喜びの両方を実感することができました。

現在は、静岡県教育委員会義務教育課に赴任し、指導主事という新たな立場で教育活動に取り組んでいます。慣れ親しんだ学校現場から離れるのは名残惜しかったですが、学び続ける教師であるためにも新たな学びのチャンスととらえて、さらに自己研鑽に努めたいと考えています。「現場の先生方、そして子供たちに届く仕事を」という思いを大切にしながら、自分に与えられた職責を果たしていきたいと考えています。

(平成24年3月授業実践・カリキュラム開発コース修了)

～学び続ける修了生～



学び続ける 教師になるために

横山 友亮 さん

【丸亀市教育委員会事務局 主任指導主事】

鳴門の潮風と共に学んだ全国の同志との出会いは、私にとって大きな転機となりました。

教職大学院での学びは、今も心の中で、教師としての判断・行動基準として大きな役目を果たしています。また、教育行政に携わる上でも欠かせない力となっています。

大学院修了後、置籍校である元の学校に戻りました。しかし、教師としての視点やスタンスは、「前とは違う」ことを直感的に自覚できました。例えば、子ども一人ひとりの姿を多面的にみようしたり、積極的に同僚の先生方と対話をする場を設けたりすることは、以前の私にはない姿でした。つねに課題意識をもって取り組んできたことが、子どもたち、先生方、保護者の方々と楽しく本音で語り合いながら、お互いが成長を実感できた時間になったと実感しています。

教職大学院は、自己が学び続ける意味や価値を自問自答し、学校課題解決のためにアクションリサーチができることです。改めて、この場所で出会い、学んだことに感謝しています。

(平成 24 年 3 月学校・学級経営コース修了)



かけがえのない学び

田中 行 さん

【四国中央市立川之江小学校】

私にとって教職大学院での学びはかけがえのないものでした。特に、経験知に頼る指導から理論的な根拠を踏まえた指導ができるようになったこと、今までの実践を理論をもとに考え直すことで頭の中が整理できたこと、の2つは今の私の支えとなっています。

在学中は、「生活習慣・学習習慣の定着を軸とした児童の『学ぶ意欲』の向上」というテーマで、実習校の課題解決に取り組みました。実習校の課題を明確にして解決の手立てを考え、実践するという流れは、PDCA サイクルに則ったものでした。そこから、指導は子どもの実態から、という教師としての基本的な姿勢を改めて学ぶことができました。

修了後2年目からは新しい学校に異動し、教務主任を拝命しました。教職員数51名という大規模校で、新たな校務にチャレンジしています。まだまだ仕事を覚えるだけで精一杯の状態ですが、教職大学院で学んだ理論が根底にあるので、学校のよさや課題が見えやすいようにも思います。今後も学び続ける教師であり続けるとともに、目の前にいる子どもたちのために全力で頑張ろうと思っています。

(平成25年3月授業実践・カリキュラム開発コース修了)



学びを生かして

三浦 洋子 さん

【鈴鹿市立白子中学校】

中学校に戻った私は以前と同じ研修担当となりました。院で学んだ学校組織開発の理論を生かし、実習に引き続き現場で実践できる立場を与えられたのはうれしいことでした。研修を進める上で、生徒の変容を出し合う場をつくり、教職員の情報共有を進めていくことに重点を置くようになったのは、以前とは大きく変化した点です。特に校内の実践交流においては大規模校だけに様々な方法や工夫があり、大いに学ぶことができました。同時にこうした交流が取組の推進力となっていることを実感する毎日でした。

今年は進路指導担当となりキャリア教育に取り組んでいますが、ここでも院での学びを生かし、学校課題を踏まえ協働的に実践を進めるように努めているところです。

幸いにも私の勤務する鈴鹿市は鳴門教育大学と連携しているため、大学の先生方のサポートをいただいています。先生方のご助言から新たな知見を得て実践に生かすと同時に、日々進んでいる研究の様子を垣間見て、学ぶ意欲を新たにしています。こうした学びの機会も大切にしながら、今後も職場の先生方とともに教育改善を図っていきたいと思っています。

(平成 25 年 3 月学校・学級経営コース修了)